

取材・文＝中村はぎ乃 写真提供＝清水公陽



#021 清水公陽さん

Koyo Shimizu
1999年2月1日愛知県西尾市生まれ。21歳
四段

家族との一枚。「父は試合前の私のメンタルをうまく調整してくれます。本当に『持ち上げ上手』なんです」妹の琴音さんは奈良大学附属高校1年生。中学時代は3年連続で全中に出場しており公陽さんも一貫している剣道女子だ。母・明美さんは剣道未経験だが、遠征にはいつも一緒についていきサポートしてくれたという。「両親の支えのおかげで今の自分があります」ちなみに、この家族写真を撮影してくれたのは、清水さん兄妹が中学生時代にお世話になった杉浦政之先生(平坂中学校)。(杉浦先生、ありがとうございます!)



自分が目指すものが何かを考え抜いた1年

公陽さんが剣道を始めたのは3歳の時。父・康作さんは錬士六段、叔父は全日本選手権にも出場経験のある清水基史さん(愛知県警)というザ・剣道ファミリーだが、決して強制されたわけではない。剣道のカッコよさに憧れて自ら志願したという。

秀正館(当時)で基本を習い、小学5年生の春に東レ居敬堂に入門した。居敬堂はしつづけに厳しい道場で、わがままだった公陽さんはしょっちゅう叱られていたそうだ。しかし、トイレのスリッパをきちんと並べたり自分の行ないを正したりすると物事がうまくいくことを実感し始めた公陽少年は、次第に整理整頓と自主練を率先して行なうようになった。小学6年生の時に夏の全日本道場連盟主催の大会で3位の成績を収めると、平坂中学校でも全国中学校大会で3位に入賞した。

剣道と勉強の両立を貫いた星城高校では、残念ながら際立った成績を収めることはできなかった。しかしその後、愛知学院大学に進学すると、1年時に東海新人戦で個人優勝を果たし、以後4年間、レギュラーの座を守った。

公陽さんは、164cmと男性剣士としては小柄な体格。だからこそ、工夫と研究を怠らないという。相手の間合を盗み、誘い、引き出すのが得意だ。自分の剣道を「相手に嫌がられる剣道」と分析する公陽さん、その剣風についていろいろの批評を受けることもあるそうだが、「聞くべきところは聞いて、曲げないところは曲げません」

芯の強さとしなやかさが、公陽さんの強さかもしれ



大学最後の東海大会にて、主将として新体制で臨むはずの最後の1年は、コロナの影響により思うような活動ができなかった。引退試合となる東海学生剣道大会に向けた部活もグループ練習のみ。全体練習が一度もできぬまま、初めて全員集合したのは大会当日だったという。しかし、「動きは良くありませんでしたが、仲間と声を掛け合ってフォローし合いました。久しぶりの試合は楽しかったです」。愛知学院大学は3位に入賞した

中学3年時、全国道場少年大会にて、2位入賞(前列右から2番目)

ない。

大学では、専門(法学部)の授業に加えて教職課程の授業も履修した。1限から5限まで休みなく講義を受けた後に部活動。かなり忙しいキャンパスライフだ。だがその努力の甲斐あって、中学社会の免許と高校の地理歴史・公民、計3つの免許を取得している。卒業後は教員として働く予定だ。

実は公陽さん、当初は一般企業への就職を考えていた。内定をもらい、ホッとしたのも束の間、6月に入るとこの選択が本当に正しかったのか迷いが生じ始めた。熟考の上、やはり教職の道に進むことを決めた背景には、幼い頃から指導を受けてきた恩師や先輩

の存在があった。恩師や先輩に連絡を取って胸の内を率直に語り、教員の苦労もやりがいも聞くうちに、自分の気持ちを再確認できたという。これまで指導者に恵まれ与えられてきた自分が、今度は生徒に対して何かを残してあげたい、そして生徒と一緒に成長していきたい……。

最後に、同世代や若い剣士に向けてメッセージをひと言。

「(大会や錬成会等の各種イベントが中止になる中)モチベーションを維持するのは本当に難しいと思います。でも、自分が目指すものが何かを考えてみる良い機会。どうかあきらめないでほしいですね」